

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（一二）

第四九則 洞山供真

〔示衆〕

衆に示して云く、描不成、画不就と。普化は便ち斤斗を翻えし、竜牙はただ半身を露わすのみ。畢竟、那人かこれ何の体段。

〔本則〕

挙す、洞山、雲巖の真を供養する次いで、（誰れか道う、これ仮と。）遂に前の真を遡するの話を挙す。（二廻拈出すれば、一廻新なり。）僧ありて問う、雲巖、ただこれはれと道う意旨いかな。（且喜すらくは、錯って認めざることを。）山云く、我れ當時、ほとんど錯って先師の意を会す。（己れをもつて人に方ぶ。）僧云く、未審、雲巖、還って有ることを知るやなしや。（草を折って天を量る。）山云く、若し有ることを知らずんば、いかでか恁麼に道うことを解せん。（日、出でて山

に連なる。）若し有ることを知らば、いかでかあえて恁麼に道わん。（月円かにして戸に当る。）

洞山さまについては、すでに第一〇回の第四九則「洞山不安」のところでのべました。『従容録』百則中、洞山さまをテーマとするのは五則ほどありますが、今回は「洞山供真」という則です。

「供真」とは、肖像画を掛けて供養することです。禅門では、亡きお師匠さまなどに対して、報恩のために親しく供養のまごころをつくすという大切な行事の一つとされています。

まず、万松の「示衆」をみましょう。「絵かきの名人でも仲々うまく描けないものがある。たとえば驚の声や松風の音など」。ところが、唐代の普化和尚は師匠からポートレートを描いてみよといわれ、トンボ返りをうち、また、竜牙和尚は半身だけを現わした、こうした祖師たちの振舞いがわかるかな。」という意味です。とても簡単にはわかりませんね。

そこで、「本則」に目を移しましょう。洞山さまが亡き本師、雲巖さまの命日に肖像画をまつて法



事供養をしたとき、むかしをふりかえって語りました。

「わしがまだ雲巖さまのもとで修行をしていたころ、『先生の没後、人から先生の肖像が描けたかと聞かれたら何と答えましょう』とたずねると、雲巖さまは『ただこれこれ』と示されたのじゃ。」

すると、ある僧が洞山にたずねた。「それは何を意味するのですか。」洞山「わしも昔はそれがわからなかったのさ。」僧「いったい雲巖さまは、これこれのありかをご存知だったのでしょうか。」洞山「知らなけりやそんなふうには云えぬ。というて、知っておりやあ、そんなふうには云わんじやう。」

この「本則」も、けっしてやさしくはありません。しかし、体当りをすれば、おのずから道は開けてくるものです。まず、肖像を描くとは、仏法の真理を表わすということ。すると、普化のトンボ返りや竜牙の半身は、身をもってそれを表現したのですね。

雲巖は、それを「ただこれこれ」といった。仏法の真理は現にあるものそのままのすがただ、ということを示したのです。『祖堂集』（九四五）という古い禅文献によ

ると、この雲巖と洞山の間答は雲巖の臨終のときとされています。

とすれば、雲巖のいった「これこれ」は、いままさに死なんとする自分の身を指したのかもしれず、また、特定のものではなく、天地宇宙に満ちているすべての真実のすがたを指したのかもしれません。いずれにしても、あらゆる存在は真実のすがたとみる法華経の諸法実相の思想に通じるものです。

ところが洞山は、当時まだその道理が現実の宗教体験として真底から会得できないでいました。本則にはありませんが、洞山はそののち雲巖のもとを離れて大河を渡った。そのとき、水に映るわが姿をみてこれを氷解したのです。思わず発した悟りの詩、それが「過水の偈」でした。意識しましょう。けっして外に求めてはならぬはるかに、自分から遠ざかるわたしは今、ひとりで行くがいたる所で渠に逢う

渠は、今の自分にほかならぬわたしは今、渠ではない
こう悟って、はじめてできた真理と一つになることが
いうまでもなく、雲巖の示した「これこれ」を洞山は「渠」と表現したのであり、「渠」という真理は、修行にはげむ現前の自分を

おいてないことを悟ったのでした。ただし、それはただ安閑とした日常の自分ではなく、あくまで修行にはげむ実践の上にのみ、自然に訪れる渠だったのです。身心を放下して実践するとき、「ほとけのかたからおこなわれる」と道元禅師のおっしゃる道理であります。



白根山頂附近からの五色沼

と理解していたのかというのは、いかにもマトがはずれています。それを万松は「草を折って天を量る」、つまり、小僧の知恵で雲巖の心境を量るなどおろかなことだとコメントしています。「これこれ」は、実体について名づけられないものではなく、禅修行の当体そ

のもののですね。だから洞山さまのいうように、それは知とか不知とかをこえたものです。

この九月、わたくしは単身で奥日光を歩き、稀有の体験をしました。二六〇〇mの白根山から五色沼に下り、たれもない寂けさの中で、周りを囲む山々に早くも始まった紅葉が、北↓西↓東↓南の順であることをまのあたりに知り、愕然としました。そして、再び五色山へと登る途中、しだいに小さくなる沼の面が西から東へ刻一刻と鮮やかに色を変えているのに気づき、我を忘れたのです。

それは、時も人智のはからも超えた、まったく悠久なる大自然のうごきそのものでした。何万年となく続いているこんなひたむきの歩みこそ、おのずから仏法の道理に契うといわずして何といえよう。こう思うと感きわまり、いっしか目頭があつくなりました。肉体的には苦しい山歩きを通して、自然はすばらしい真理をチラと垣間見せてくれます。

日本は自然の風光に恵まれています。わたくしたちは、峰の色や谿の響きを虚心に見聞して、修行の教訓としてゆきたいものです。

（山主）

常真寺での一泊参禅



常真寺一泊参禅参加者一同（H3.6.9）

〔参加者〕

小畑節朗、寺田哲朗、四宮清一、
高野千代子、中嶋南州男、染谷は
る、安本小太郎、五十嵐嗣郎、杉
浦上太郎、下村忠男、武田博志、

加藤健之、宮田哲男、佐藤初恵、
石井つや、今泉章利、今泉房子、
浅野眸

（以上一八名）

「星への手紙」より

北原敏直

わけてあげよう
よろこびを感じたら
ほかの人にも
わけてあげよう
人生なんて短いから
自分なんて、点のようだから
一人でも多く
よろこばしてあげよう
わけてあげよう
ちりのような
もっともっと
空気の分子のような
小さなよろこびを
一人一人に、わけてあげよう
ああ、早くしないと
人生がつきてしまう
点のような自分が
けしゴムでけすように
きえてしまう
今感じるよろこびも
むだにはできない

今年で六回目となりました一泊参禅は、平成三年六月八日（土）～九日（日）の両日にわたり、昨年と同じ栃木県鹿沼市の常真寺で実施されました。出発日は梅雨入り第一日目となりましたが、幸い天候にも恵まれおだやかな晴天の中、バスで目的地に向いました。参加者は、椎名老師他一八名でした。常真寺のすぐ前には、たしか小学校があったはずとっておりました。が、建てかえのためすっかり壊され、広々とした校庭がより広くなり、改めて無常の思いを新たにいたしました。常真寺での参禅は、次の差定により行なわれました。

六月八日

上山 午後三時
講話 午後三時三〇分

皆川 老師

坐禅 午後四時三〇分
晩課 午後五時三〇分

薬石 午後六時

入浴 午後七時

夜坐 午後七時五〇分
開枕 午後九時三〇分

六月九日

振鈴 午前四時三〇分
暁天 午前五時
朝課 午前五時四〇分

會員故森正氏追悼供養

作務 午前六時

小食 午前七時

坐禪 午前八時三〇分

禪講 午前九時三〇分

椎名 老師

坐禪 午前一〇時四〇分

点心 午前一時三〇分

下山 午後〇時三〇分

素朴な大自然に囲まれたその中で聞く小川の流れと小鳥の声に身も心も洗われ。一同無事下山いたしました。

第一日目の皆川老師のご法話は四歳の頃から進行性筋ジストロフィー症という難病を病み、千葉県の国立下志津療養所で療養した北原敏直君の書かれた詩をもとに、常に死の恐怖と向いあって生きていく少年が、その中で生かされている生命を実感し、解脱していく姿をうたいあげた詩を通して、仏教者としての我々はどう生きるべきか、その自覚を促され、大変な感動をいただきました。

第二日目の椎名老師のご法話は『典座教訓』にもとずき、中国に渡られた道元禪師が、典座という修行の場から、悟られた教えをも

とに供養する心について話され、すべて大自然の生命をいただいで生かされている自分達を改めて知らされ、感謝の心が欠けている日常を深く反省させられました。

この二日間は、前回同様、皆川老師とそこご家族による温かいおもてなしとお心づかいを存分にいただき、ただただ有難く、感謝の言葉もございませんでした。

帰路、栃木県大平町にある曹洞宗の名刹大中正を参観いたしました。大杉の山中を歩き、七不思議のお寺に詣り、しばし幽玄の世界を味わいました。

今回もまた、陰でご尽力いただきました椎名老師ならびに、幹事の杉浦、今泉様、そして休む間もない写真担当の中島様に一同心より御礼申し上げます。



常真寺のお庭で

私の体験した事

沼南町 佐藤 初恵

こちらに越して来る二年前の春の事です。百三〇坪ばかりの敷地に二二坪の小さな平屋建てを父母からいただいで一人で住んで居りました。仲良しのお友達にさそわれて一泊旅行に出かけました。誰

にことわる事もなく遠慮のない外泊です。次の日の午後お茶を飲んで散会仕様と言いつ出したお友達を振り切るように我が家に帰って来て、リビング台に荷物を置いた途端に思わず「アッ」とさけんだのです。まずガスがコンロの上で青

白い炎を出して燃えて居たのが目に入りました。私は思わず唯有難いと合掌して火を止めその場にそのままペタンと座りこんだまま一人でに類につたわる涙を手でぬぐっていました。

勿論ヤカンは真黒黒でした。

もし私の帰宅が三〇分でも遅れて居たらどんな事になっていたでしょう。思い出す度に、私の人生航路の中で忘れる事の出来得ない一番有難かった事だと思っています。

此の時からです。私はいつもお風呂に入る度に湯船の中で、守り本尊様である勢至大菩薩のご真言

「オンサンザンザンサクソワカ」を合掌して二二遍唱える様になりました。どこに行っても、一日もおこたる事なくスムーズに出来るようになったわけです。

仏行などの知る由も無い私に、御仏は広大なご慈悲をもって知らず知らずに仏行へのお導きを下さったのかと、今は思えてなりません。

今、此の沼南町に住む事が出来たのもご慈悲の賜物でしょうか。七〇歳を過ぎてから初めて坐禪を知らしていただき、そしてお受戒、今また御老師様、先達様のお導きで在家得度を受けさせていただくことになり、私はなにもしていない。そしてなんにも知らないのに、唯々広大無辺のご慈悲をいただく幸福で一杯です。真実自分に素直に生きる事はいくら年を重ねても、大につけ小につけ大変な事だともつくづく身に染み感じつつ今日も又生かさせていただいている私です。

無より明、明より無への

旅の日を

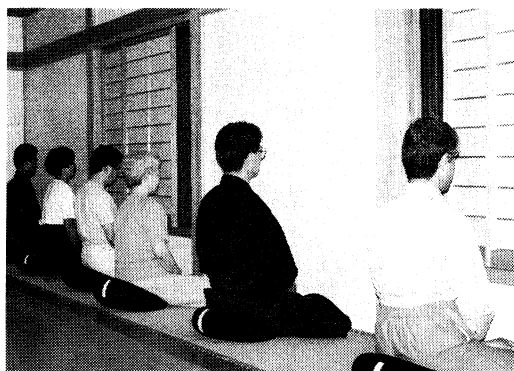
三千世界に 答える人ぞなく

“医は仁術”を超越した医師に ひたすら合掌

柏市 杉浦 上太郎

私は営業企画を職務として、ある製薬企業に勤めております。

職業柄、医師や薬剤師の先生方とお逢いする機会が多々ありますが、このたび一般の常識を超えた素晴らしい医師との出会い、また不思議な事実を見聞いたしましたので、ここに述べさせていただきます。その先生とは、四国の徳島市で開業されていらっしゃる井村次郎先生のことです。



一泊参禅風景(一)

昨年の九月、当社のある健康食品を、徳島市の開業医の先生が、特定の患者さんに奨めて下さっているとの報告を受け、私はその調査と販売促進の目的で、井村先生を訪問させていただいたのです。

井村先生とは次のような方です。

先生は開業されてすぐ画一的に処する現代医学に疑問を感じられ、その後東洋医学(漢方、鍼灸等)等を研鑽され、今では気功を中心とした独特の「気診」という診療方法を編み出されました。

気功術を体得されたのは、坐禅と医療関係者を中心として組織している気功研究会であったとのこと。

とくに坐禅は、宇宙のエネルギーである「気」を高める上で、大変有効との指摘です。

先生がこのような研究に没頭されるようになった動機は、ひたすら病気で苦しむ患者さんを何とか救いたいとの一念からです。

朝の八時から夜の八時迄、昼食時間の一分間以外は全て診療時間。また深夜は、通院できない重

症患者さんのために「気」を送る『遠隔療法』を行なっています。まさに先生の二四時間は、患者さんのために費やされています。それらはすべて無償です。

医薬品も「気」が適合しない場合は、あえて投与しません。先生は物欲を一切放捨し、ひたすら患者さんのためにだけ考えていらっしゃいます。

“無償の働き”であるからこそ、最もよい状態で「気診」ができる。これが井村先生の信念です。

当社の製品も、特定の適合する患者さんだけお奨めし、但し商品を取り扱い薬局を紹介し、一切手数料は取らないのです。

私は先生のお話しをお聞きしながら、何とも形容のしようもない程の敬服の気持で一杯となり、心の中で思わず「井村先生はまさに菩薩様」とつぶやきつつ合掌をいたしておりました。

医は仁術ならぬ算術が当たり前の現代にあつて、このような先生がいらっしゃることを知ったこと、直接親しくお話しをさせていただいたこと、大変幸せな気持ちにならせていただきました。

次に私が実際に知った井村先生の偉大な「気診」の力について申し述べさせていただきます。

井村先生とお別れして二カ月程後、私の知人で腎不全のため長年人工透析をされ、そのため昨今副次的障害が多発して大変苦しんでいる方がいらっしゃいました。

何とか力になりたいものと思っていた折、井村先生にお手紙を差し上げる機会がありましたので、恐縮しつつも「気診」の遠隔療法をお願いいたしました。すぐ先生から快諾の返事をいただき、ご本人の写真と症状の様子を知らせるようにとのご指示を賜りました。

その方のその時の症状は、脊髄と股関節部に脂肪の固まりが付着し、それが災いして頻繁に襲う激痛と発熱のため入院いたしておりました。主治医からは、週三回も人工透析しているため、危険を覚悟の上で手術をするか、ひたすらこの痛みに耐え続けるかの二者択一、極めて残酷な選択を問われておりました。

井村先生は、早速毎日徳島から遠く離れた千葉県南部の大多喜町に向つて、治療の「気」を送って下さいました。

果たせる哉。二カ月程経たある日突然、その痛みがピタッと取れてしまいました。精密検査の結果、その元凶であった脂肪の固まりが、跡形もなく消えてしまったのです。

主治医も不思議に思い再検査をして確認をしたとのこと。知人の喜びようがいかにありがたかは、筆舌に尽くしがたいものがありました。

「至誠天に通ず」、人間の計らいを越えた世界。私はその事実を見させていただきました。本当にありがたいことと思っております。私はこのような方をもうひと方存じ上げております（機会を見てご紹介申し上げます）が、この様な先生方と面識を得ることができましたのは、不思議なことに龍泉院参禅会にご縁をいただいてからのことです。

やはり最初の出合いで感動させていただいた椎名ご老師様に導かれて、仏縁を賜わったことのお陰さまに他ならないと思っております。この根本に対して改めて感謝申し上げます。

私の仕事は健康に関すること。今後共、本当に多くの方々のお役に立てますよう椎名ご老師様のもとにて仏道修行に勤しませていただく存念です。

全ての事に感謝して、合掌。

莫 蹉 過

一月の参禅会の喫茶の時、御老師様が「便法だが腹式呼吸をしているうちに時が経ってしまった」ことを話されました。さて、それから道友の腹式呼吸への熱のこもった蘊蓄が傾けられます。

ほほえましい光景とは肯えない五〇歳の書生っぽを赦して頂きたいと思ひます。

道元禅師様の著作に精通なされ、単伝の仏道を持行されておられる方より、「つまるところ非長非短（長からず短からざる呼吸）のお示しのまま坐りなさい」と説いて頂いたことは一度ならずあります。



一泊参禅風景（二）

船橋市 加藤 健之

す。「坐禅は習禅には非ず」の教えを頂いておる私達です。小手先の技術でなく、脚を組み手を組み正身端坐を保ち続ける丈です。それ故とても簡単なことであり、とてつもなく難しい行なのかと思いつつ日送りをしております。

「便法だが」の部分で蹉過（さくわ）してしまうと、御老師の大慈悲心まで汲み落とすことにならぬでしょうか。脚をいたわりつつお茶を頂き、お菓子を食べし自己紹介をするひととき、会費もなく二〇年続いていること、不思議といえは不思議です。

毎回御提唱が終りますと、「あちらでお茶を」と言ってお下さいますが、天徳山の喫茶去の公案として肯い、いつぞや道友の方が仰って呉れたように今月の参禅会が終り翌月の会が始まる時です。

本年の新年会の時に、茶菓代や会報やらで、会費の話題が出て結局は志納箱へと落ち着きました。一部の篤志家へ大の大人が寄りかかるのはおかしいという論旨が大勢だったと感じましたが、書生っぽには落ち着けぬことでした。

仏道の構造は、世間の常識とも道徳とも別の枠組みに在ること、こんな議論をする間にも、頭燃を払うが如く坐禅を好むべしではなからうかと雑念が心を満たします。

会報の印刷代が無ければその都度行乞をするのが伝統ではなからうか、といつて何も托鉢の恰好で群衆の中を乞食すべしというのはなく、西洋的表現ですが帽子を回せば浄財は集まりましようということ。

おかしいといって人様を裁くが如き言動は仏道とは無縁のもてはないでしょうか。これ以上文言を連ねると自分も又一方の裁く側になってしまひましよう。

偏見不曾蔵の仏法を蹉過せずに日送りをして行きたいと思ひます。新年会の議論も御老師様に有難く締めて頂きました。「寺が貧乏だから皆様に要らざる心配をさせてしまひました」と。

学道の人は尤も貧なるべしとも、学道は先ずすべからず貧を学すべしとも（いづれも随聞記より）示されております。

言を出さんとせん時は、三度顧みて、何とも考えたつもりです。利あるべければ是れを言うべし、自利、利他があるや否やは自信がありません。

一日写経を体験して

我孫子市 浅野 眸

先日、一日写経体験をして参りました。場所は、本堂でミニクラシックコンサートを開くなどユニークな活動で、話題の柏市花野井の大洞院です。木村御住職のもとに約六〇人程集り、御指導を受けました。朝八時から正午迄、老若男女、酷暑の中、汗を流しながらも楽しく和やかなひとときでした。

先ず「般若心経」の中の一節「色即是空」についての講義を受けました。形あるものとして存在



一泊参禅風景（三）

するものすべて絶対不変なものはない、自分も含めてすべてお互いに当てにはならない、当てにはならないけど人間は時として、とてつもないすばらしいことをする。一寸先は闇ではあるけど、お互い一つ一つ築いて生きて行くのだ。例えば、よそみしては見逃してしまふ瞬間的に華やかな花火のこと、本堂の前に立っている樹齢三百年の銀杏の木のあるがままの存在、誰も止めることの出来ない人間の老化現象を、まだお若い四二歳の御住職自身の薄くなられた前頭葉の頭髮に譬えたり、癌で若くして亡くなられたある医師の詩の引用等、多くの譬え話で、解説して下さいました。本当に私達は一瞬一瞬変化しており、その一瞬を疎かにする事は人生すべてを疎かにする事になります。「今ここ」を生きているという事は「いま」の「ま」を言う時には「い」は既に通り過ぎていくのだから、正に一瞬を生き抜くことなのだと、改めて感じ入ったことでした。

それから、写経に入りました。最初に「般若心経」を全員でお唱

えしてから、書き始めました。今回初めての方も大勢いましたので書き方はお手本の上をなぞって行く方法でした。半紙が風で飛ばぬ様本堂の南側の戸を全部閉めてしまいましたが、汗が手の甲に流れ落ち、正に修行そのものでした。一時間半前後で全員写経を終り、作品を、三ツ折りにして、御本尊の前に積み重ね、再び、御住職と一同皆共に「般若心経」を唱和しました。作品はすべてお釈迦様の胎内に納めて頂けるとの事でした。最後に一同三人づつ組になって、御本尊に御焼香し、合掌して、つがなく終了しました。その後でお客様の下さった麦茶のなんと冷たく美味しかったこと、正に甘露甘露でした。素晴らしい体験でした。

八月、九月に入って、お盆、お彼岸、法事と、様々な行事を控え、超多忙な御住職の貴重な時間を、半日も私達の為に割いて下さり感謝、感謝のひとつでした。

今後は一日一枚を目標に、様々な所願を込めて写経して行きたいと考えております。



合掌

雲の行き来

ー 会員消息 ー

湾岸戦争の余燼さめやらぬ春彼岸の一日、高間利介翁より手紙と共に高木敏子著『ガラスのうさぎ』が届けられた。三月の定例坐禅出席会員に差し上げました。

戦争体験が歴史の一頁となろうとしている今日、語り部たらんとする気概を拝察して感慨新たなものがあります。

現在、翁は療養中ではありますが病床にあっても同道の人々に対して限りない思いやりを続けていただくことに感謝する次第です。

会員森正氏は去る六月一日にご逝去されました。行年七六歳、ここに謹んでお悔み申し上げます。

故森氏は昭和六〇年六月より参禅されておりました。六月二日の通夜に幹事が参列してご冥福をお祈りいたしました。

戒名は、諦道正観居士

また、六月九日一泊参禅の折、朝課後に参加者一同「修証義」を読誦し、森さんの菩提を供養させて頂きいただきました。温顔で、坐禅に勤しまれ熱心に提唱を聴いておられた姿が思い出されます。

達磨はなぜ東へ行ったのか

「祖師西来意」 私見

船橋市 政安 裕良

「趙州、因みに僧問う、如何なるか是れ祖師西来意。州云く、庭前の栢樹子。」

無門関第三七則「庭前栢樹」は、初心者向け公案であると聞いているが、勿論未熟の私に其の真意を

理解する事は、難しいことであった。

七月初め新聞の評論欄で、韓国映画で、表題の映画が上映されているとの記事を読み、是非見たいものであると思って、調査したところ、岩波ホールだけで上映しており、客席は二百よりないとの事であったが、七月一日（土）友人の還暦祝の帰途、行った所上映五分前で売り切れ。その後も中々都合がつかず、去る八月二日の日中、会社をサボって観に行ってきた。

私が映画を見なくなってから、随分歳月が経ったものである。確か数年前に、親鸞聖人の一代記を描いた、幻想的で幽遠な映画を観て以来であらうか。

真面目である事がバカにされ、銀行、証券、不動産、ノンバンク等の金、金と金を巡る不正が横行し、金の亡者となり、利潤と効率のみが珍重される現代に於いて、真正面から、この様なテーマを取り上げ、然かも、国際映画祭で、グランプリを獲得したと云うことは、希有の事で

はなからうか。然かも小劇場とはいえ、毎回観客が入場待ちの状況と云うことは、物質文明に疲れ果てた多くの人々が、心の底で、何物かを、求めていると云う状況物語っているのではなからうか。

映画のあらすじを簡単に書いてみると、人生に大きな疑問を持った青年キボンは、何かを求めて、盲目の母と貧しい妹の生活を扶ける事も無く、天安山の下の禅寺に行き、其処で、この山奥の荒寺をへゴクと云う老禅師が守って居るので、訪ねて見るてはどうかと諭される。

へゴクは、睡魔に克つ為、氷壁を背に坐禅を組んで、脇腹に凍傷崩れの化膿が有る。へゴクは嘗て街に出て、孤児のへ진을拾って来て、山で育てており、今や一〇歳位の少年に成長している。へ진은番いの野鳥の片割れを、石で落として死なせてしまう。へ진은生き残った、其の片割れに付き纏われて、生命の恐ろしさを痛感すると共に、野鳥の死骸を掘り起こし、其れが蛆で一杯なのを発見してビックリして、断崖から川に落ちてしまうが、意識を回復して道に迷っている時、藪の中から現われた牛に助けられて、老師のもとに帰る事が出来た。

キボンは老師の薬を求める為、街に托鉢に行き、母の居る茅屋を訪ね、出家の生活に疑問を持ち、老師に心の迷いを打ち明ける。老師はキボンを錫杖で叩く。キボンは悟りを求めて滝壺の中で坐禅して、意識不明となり、老師に助け出される。然しへゴクはその事が原因で死期を早める。へゴクはキボンに対して一つの公案を授ける。然しキボンはそれが、死を睹した公案であることを知らない。

病床のへゴクが、迷えるキボンに頼んだ事は、「自分が入寂したら、下の寺に連絡せずに、一切の儀式は省略して、納屋の中の古い長持が、棺桶にお逃えむきだから、あの中に入れて、何が有ろうと、一夜の中に片付けて欲しい。そして遺骨は、大自然の中に撒いて欲しい。これが私が君に与える鍵だ」と云うものだった。

一夜、下の寺で僧舞が行われ、キボンとへ진이これを見に行っている間に、老師は坐脱する。キボンは予ての禅師の命令通り、その遺体を、一人で石油を掛けた枯れ枝の山で火葬にして、山野に遺骨を撒く。その時劃然として悟るもの有り、「下の寺に連絡して置く」との言葉をへジンに言い残して、牛を引いて原野に下りて行く。



へジンも悟るもの有り。又憎惡に満ちていた、野鳥の片割れも、怨讐を越えて、大自然の中に飛び立って行く。

映画の梗概は以上の通りではあるが、ヘゴクの言葉、キボンの内面の声として、我々が禅寺の提唱以外の場所では、普段聞く事の出来ないような、言葉が随所に出てくる。



龍泉院の達磨大師像

出家は、世を捨てて行ったのでしょうか」

「見性成仏は只の夢かも知れません。成仏信仰のため、世を捨てられても、振り向けば犠牲にした者すべてが、飢餓の如く襲いかかり、罪悪感で奈落の底に落ちそうです」

「衆生済度とは何をいうのでしょうか。成仏信仰ひとつにすぎり、親子供への責任を放り出し、

一体何が言えましよう。誰が仏で誰が仏でないのですか。仏と衆生の別は本来ないのです。生の渦巻く娑婆世界に私は帰ります」

「禅師様は去り、私は残りました。鬱蒼とした森の中で冬は育まれ、裸木の枝先に夏が忍びよります。始めも終わりもない無量の循環で、

生はまさしく死であり、死は即ち生であるといえ、生命は未だ残っている者の側です。たえざる永遠の流れの中で、生も死もないと言いますが、死は残された者には解き得ぬ課題です」

牛が牛小屋を壊して、野に出て行く設定。藪の中からヌーッと現れて、迷えるへジンを、首に付けた鈴を便りに、迷い迷いながらも、山寺への道を案内する図。

「彼はひとり王宮を出て、暗い森に旅立ちました。しかし、二千年五百年前のある日におきた、彼の

「初めも終わりもない」
「心の平和が得られないのは、すべてを一つに入れる大きな心の器が無いからだ、実は、器はあっても我欲で一杯になっているからだ」
「心の月が水底から浮かび上がる時、己の主人公は何処に行くのか」
キボンの内面の言葉

キボンが悟りを開いて、川の流れる原野に、牛を引きながら、街へ下りて行く図。これ等は、十牛図の尋牛、見牛、牧牛等を暗示して居るものであろうか。ともかく大自然の美しさ、山寺の竈の燃える火の美しさが、非常に印象的だった。会社の親しい役員部長

(彼は私より一回り以上若い)と話し合ったところ、彼は「千利休」の映画の話を始めた。残念ながら私は、二本とも見る機会を逸してしまった。彼との話の結論は、今の時代もそう見縊ったものではないのではなからうか。何時の時代でも、世相というものの中には、必ず原理に帰ろうと云う力が働いて来るのではなからうかと云う事であったが、ともかくこの様な、永遠の生、真の自由を意図する映画

画の出てきた事には、感無量なものがある。

その後、山本玄峰師の『無門関提唱』を読み直し、『正法眼蔵』第四〇「栢樹子」、同第六二「祖師西来意」を読んで見たが、主観、客観の合一か?「境」とは何か?所詮頭での理解にも遠く、見牛等の境地には及ぶべくも無く、「祖師西来意」の公案は解けぬながらも、只管打坐あるのみか?と感ずるのみである。



行事のご案内

◎参禅会発足二〇周年記念行事

一、在家得度式

日時 一〇月一三日(日)午前九時

場所 龍泉院

戒師 椎名宏雄老師

二、「禅を聞く会」公開講演会

日時 一〇月一〇日(日)午後一時

場所 柏駅(西口)駅前

第一生命ライフデザイン

講師 ショップ柏ホール
東京大学名誉教授
鎌田茂雄先生

柏市龍光寺住職
佐藤俊明老師

◎第九回成道会

日時 一二月八日(日)午前九時

内容 坐禅・法要・法話・点心

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅

經行鐘 二声 經行

放禅鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開經偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く

講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

平成三年七月より「観音」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会その他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月八日）

积尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

「参禅会記録」（一）内は座談の司会者

平成三年

四月二十八日 二五名

（中寫沼南男）

初心者への坐法の指導を行う。又、恒例により裏山にて「筍」堀り。

五月二十六日 二六名

（宮田哲男）

六月八日～九日

一泊参禅 一八名

於 栃木県鹿沼市 常真寺

幹事 杉浦上太郎

今泉 章利

写真 中寫沼南男

六月二三日 二七名

（清水利一）

七月二八日 二四名

（四宮清二）

八月二五日 二八名

（三町 勲）

九月二二日 二四名

（安本小太郎）

▼東京国立博物館の夏期講座で、柳田聖山先生は、平安期の仏教は絵画であり、鎌倉期以後は漢詩と書で表現される、禅は中国に生まれる仏教というより、広く文明そのものの総括で、日本文明史に大きく影響する、と。渡来僧無字祖元と高峰顯日との贈答詩を示されて、音声で伝えられる言葉が文字化（紙に書かれた）されることにより、二人の間の対話だけでなく時代を隔ててその書の文化性につながる（文化性の創造）、といっておられる。

この文字化が、漢字の呪縛から逃れられないものであったのである。優れた禅僧は、この漢字の呪縛の中から自由を得た人であった。毎月の坐禅の後、椎名老師より提唱をいただいている『正法眼蔵』は、音声としての漢語も文字化された漢字も道元禅師の天才的語学力であり、この呪縛からは無縁のもので、自由自在の宗教的言語宇宙を構築されたものだという。また故に難解である。

▼坐禅は只一人が全宇宙の中で全身を挙げて坐すという仏行であるから、余計な社交は不要であるという考え方もあり、また坐禅は師と学人との出逢いが重要であり、その中での言葉が文字化（血肉化）することが必須であると共に、修行の共有化、即ち一緒に修行する道場が必要であるといわれている。参禅会発足二〇年。参禅会の今日的意義を再確認し、今後の弁道の資としたいものです。（節光記）